

理論の評価

$T_6$ も $T_7$ も $T_8$ もマツハ模型だ。 $T_7$ は局所性を持つ場形式の理論だ。

$T_5(P_1, \dots, P_n; S, U, I, J)$ と $T_6(P_1, \dots, P_n; G; S, U, W, I, J)$ の関係は、前者が第2段階の進化を経て後者になるという関係だ。

$T_6(P_1, \dots, P_n; S, U, W, I, J)$ と $T_8(P_1, \dots, P_n; S, U, W, I, J)$ の関係、

$T_7(P_1, \dots, P_n; Z; S, U, W, I)$ と $T_8(P_1, \dots, P_n; S, U, W, I, J)$ の関係は、いずれも前者が第3段階の進化を経て後者になるという関係だ。 $T_6$ と $T_7$ を総合して $T_8$ が出来ると考えてもよい。 $T_6$ と $T_7$ を総合して $T_8$ を作るのは、 $T_2$ と $T_3$ を総合して $T_4$ を作るのに似ている。 $T_8$ は、内容的には、古典物理学の最終的結論だと言ってよい。第2章で $T_{25}$ を作ったのと同様にして、 $T_{28}$ を作り形式を整えることは容易だ。

$T_4$ と $T_5$ の関係において逐次静止系に関する定理(§2-3-3)が演ずるのと類似の役割を、 $T_5$ と $T_6$ の関係において演ずるのは局所ローレンツ系に関する定理(§3-1-8)だ。ただし $T_4$ と $T_5$ の関係は、前者が進化して後者になるという関係ではないのだった。

恣意文・自明文・経験文

恣意文と自明文と経験文の番号は、ここまでに述べた三つの理論に共通で、以下のごとくだ。

恣意文: 2 4 6 8 10 12 13 14 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 36 37  
38 39 41 42 43 44

自明文: 35 40 45

経験文: 1 3 5 7 9 11 15 16 17 18 19 20 21 22 46 47